

Japanese A: literature – Standard level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau moyen – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel medio – Prueba 1

Friday 8 May 2015 (afternoon)

Vendredi 8 mai 2015 (après-midi)

Viernes 8 de mayo de 2015 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a guided literary analysis on one passage only. In your answer you must address both of the guiding questions provided.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez une analyse littéraire dirigée d'un seul des passages. Les deux questions d'orientation fournies doivent être traitées dans votre réponse.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un análisis literario guiado sobre un solo pasaje. Debe abordar las dos preguntas de orientación en su respuesta.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

次の文章と詩のうち、どちらか一つを選び、設問に沿って分析し、解説文を書きなさい。その際、二つある設問の両方に必ず答えること。

1.

鉄道員の家

5 夢うつつに、聞いている。車輪が軋む。少し前進する。また軋んで、止まる。機関車の音が一瞬、大きく息を吸い込むように強くなり、こんどは行くかな、と思うと、また車輪が軋んで、列車は停まる。車輪の軋みが、まだ暗い部屋いっぱい広がる。その繰り返しがさつきからつづいている。もう少し眠っておかなければ、昼間の仕事にさしさわる。そう思っても、車輪の軋みが眠らせてくれない。ときどき、助けでも呼ぶように、列車はヒュウと甲高い汽笛を鳴らす。その音を聞いている自分が、だんだん前進を阻まれた貨物列車のような気持になって、ベッドの中で肩にちからをいれている。

10 寒い冬の朝、レールが凍ると、重い貨物列車は車輪がすべって、登り坂で立ち往生する。レールに砂が撒かれるのだが、それでも車輪は空回りして、列車は前に進めない。その冬はそんな日が何日かつづいた。夫の出張で、姑の家に泊まっていることだけでもせつないのに、この音で目覚めてしまうと、なぜか心細さがどっと押しよせてきて、自分が宇宙のなかの小さな一点になってしまったような気持になる。

15 夫の父が鉄道員だったので、彼の実家はローマ・ミラノ本線がミラノ中央駅にさしかかる最後の登り坂の線路沿いの鉄道官舎にあった。義父の死後も姑は四人の子供たちが育ったその共同住宅に住んでいた。汽車は土手のうえを走っていて、線路と家とのあいだには、ポプラ並木や花壇のある庭もあったのだが、早朝の貨物列車の車輪の軋みは、ほとんど頭上から降ってくるようだった。

20 遠い汽車の汽笛を床の中で聞いて想像をめぐらす場面は、『失われた時を求めて』¹の冒頭にも出てくる。最近読んだ、アメリカ作家のポール・セルーも、東部の町で過ごした少年時代に、夜、ベッドの中で聞いた遠い汽車の音を、魅力的な現代版のオデュッセイア、『レイルロード・バザー』²の導入部に置いている。しかし、私がつめたい冬の朝、床の中で聞いていた貨物列車の軋みは、もつと不吉で、もつと希望がなく、まだはじまったばかりの結婚生活への不安さえ煽りたてるのだった。

25 たしかにあの鉄道線路は、二人の生活のなかを、しっかりと横切っていた。結婚したのは、夫の父が死んですでに十年近かったのに、鉄道員の家族という現実はまだそのなかで確固として生きつづけていた。私自身にとってはおそらく、イタリア人と結婚したという事実よりも、ずっと身近に日常の生活を支配していたように思える。「貨物列車」とか、「操車場」というような言葉が、乏しい私のイタリア語の語彙のなかに、汽笛の音

30 や煙の匂いといっしょに、原体験にも似た根をこまかく張っていった。晩年の義父は信号手で、仕事場は官舎のまえの土手のうえの、それこそマツチ箱のように小さくて四角い信号所の建物だった。夜になると、こちらの窓から明かりが見えたが、霧の深い夜には、直線距離で三十メートルと離れていないその明りが、ぼんやりとも見えなくなった。それどころか、窓のすぐそばのプラタナスの影さえ、牛乳のように白く澱んだ霧の中に消えてしまうのだった。そんなとき家族は、翌朝、父親が家に戻ってくるまで、事故を心配したという。食堂の壁にかかった、口髭をはやした、肩幅のひろい義父の写真よりも、私にとってはその信号所が、彼の生涯を象徴しているようにみえた。

(須賀敦子 『ミラノ 霧の風景』一九九〇年)

1 『失われた時を求めて』：マルセル・プルースト (Marcel Proust) による長編小説。一九一三年から一九二七年までかかって刊行された。

2 『レイルロード・バザー』：ポール・セルー (Paul Theroux) による旅行記。一九七五年刊行。

- (a) 作者の気持ちや思いについて解説しなさい。
- (b) 情景描写の特色とその効果について論じなさい。

蹄鉄屋の歌
ていてつ

- 泣くな、
驚ろくな、
わが馬よ。
私は蹄鉄屋。
5 私はお前の蹄あしひから
生々しい煙をたてる、
私の仕事は残酷だらうか。
若い馬よ。
少年よ、
10 私はお前の爪に
真赤にやけた鉄の靴をはかせよう。
そしてわたしは働き歌をうたひながら、
——辛抱しておくれ、
すぐその鉄は冷えて
15 お前の足のものになるだらう、
お前の爪の鎧になるだらう、
お前はもうどんな茨の上でも
石ころ路でも
20 どんどんと駆け廻れるだらうと——、
私はお前を慰めながら
トッテンカンと蹄鉄うち。
あゝ、わが馬よ、
友達よ、
私の歌をよつく耳傾けてきいてくれ。
25 私の歌はぞんざいだらう、
私の歌は甘くないだらう、
お前の苦痛に答へるために、
私の歌は
苦しみの歌だ。
30 焼けた蹄鉄を
お前の生きた爪に
当てがった瞬間の煙のやうにも、

私の歌は

灰色に立ちあがる歌だ。

35 強くなつてくれよ、

私の友よ、

青年よ、

私の赤い焰ほのおを

君の四つ足は受取れ、

40 そして君は、けはしい岩山を

その強い足をもつて砕いてのぼれ、

トッテンカンの蹄鉄うち、

うたれるもの、うつもの、

お前と私とは兄弟だ、

45 共に同じ現実の苦しみにある。

(小熊秀雄 詩集『小熊秀雄詩集一』一九三五年)

(a) この詩の中で、私と馬の関係はどのように描写されていますか。

(b) この詩の文体上の特色と効果を、リズムという観点から述べなさい。